

平成 19 年 12 月の解説（府県天気予報）

【12月の天候状況】

上旬のはじめに低気圧が日本付近を通過して、全国的に雨や雪が降りました。その後は冬型の気圧配置が続き日本海側では雨や雪の日が、太平洋側では晴れの日が多くなりました。中旬の前半には日本付近をしばしば低気圧が通過して全国的に雨や雪の日が続きましたが、後半は冬型の気圧配置となり日本海側では雨や雪の日が、太平洋側では晴れの日が多くなりました。下旬のはじめとおわりに低気圧が日本付近を通過して全国的に雨や雪の日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、ほぼ全国的に平年より少なくなりました。降水量は平年に比べて北日本太平洋側、東日本、西日本で多く、北日本日本海側で少なく、沖縄・奄美では平年並でした。気温は北日本で平年並、東日本、西日本では平年より高くなりました。

【12月の検証結果】

17 時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が 85% で例年（注）より 2 ポイント高く、明後日予報が 83% で例年より 3 ポイント高くなりました。地方毎の適中率では、明日予報は北陸、近畿地方で例年より 5 ポイント高くなりました。明後日予報は東海、四国、沖縄地方で例年より 6 から 7 ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は、ほぼ全国的に例年より 0.2 から 0.3 小さく、全国平均は例年より 0.3 小さい 1.3 でした。また、最低気温の予報誤差は、北海道、北陸地方で例年より 0.3 小さく、全国平均は例年より 0.2 小さい 1.5 でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12月の天気予報から】

年の瀬の 12 月 28 日から 29 日にかけて低気圧が発達しながら日本付近を通過して全国的に雨や雪の天気となりました。翌 30 日（図 1）は冬型の気圧配置となって日本海側の地方を中心に雨や雪となりましたが、関東地方も広い範囲で雨が降り、日中は茨城県を中心に雷雨となりました。

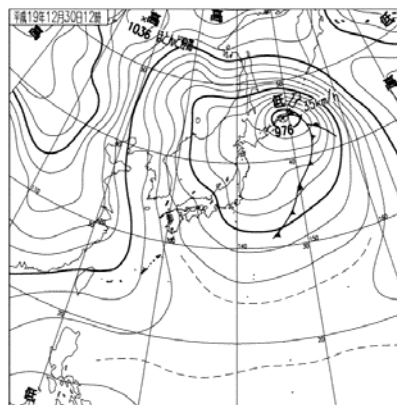


図 1 地上天気図（12 月 30 日 12 時）

29日17時に発表した東京地方の明日(30日)の天気予報は、「晴れ時々曇り 多摩西部では夜のはじめごろ雪」、降水確率は10～20%と低い確率で、山沿いを除いて雨や雪が降る可能性は低いと予想していました。

低気圧が通過した後の30日は、上空の寒気の影響が懸念されるものの、冬型の気圧配置となるため関東地方は基本的に晴れると予想したためです。寒気は日本海の上空5000m付近にあって東へ進んでおり、関東地方でこの影響が最も大きくなる30日の夜には大気の状態が不安定になって山沿いで雪や雨が降る可能性が大きいものの、平野部では広い範囲で雨が降ることは少ないと判断しました。

ところが実際の天気は、朝から昼前にかけて関東地方南部を中心に晴れ間が広がったものの(図2)、昼頃から夕方にかけて北部を中心に雨雲が発達して茨城県などでは雷が発生し、東京地方も予報に反して平野部で雨が降りました(図3)。午前中に晴れて地上付近の気温が上がったところに、予想より早く上空に寒気が流入して大気の状態が不安定になったため、これをきっかけに雨雲が広がったものです。

上空に寒気が流れ込むことで、大気の状態が不安定になって発達する雨雲は、降水の強さ、範囲、時間帯が上空や地上付近の気温、風、地形などの状況によって複雑に変化するため予報が難しい現象の1つです。このような現象も的確に予報できるよう、今後も予報技術の改善を進めてまいります。

【2月の天気予報の利用にあたって】

2月は1月と並んで1年で最も気温が低い月ですが、低気圧が発達しながら日本海から北日本に進むと、強い南よりの風が吹いて気温が急激に上がり、多雪地帯ではそれまでに降り積もった雪によりなだれが発生し易くなります。一方、低気圧の通過後は強い北よりの風が吹いて気温が急速に下がります。このように2月に低気圧が発達しながら日本海から北日本を通過する際には、大荒れの天気とともに、なだれや急激な気温の変化等に注意が必要です。各地の気象台が発表する気象情報に気をつけて下さい。

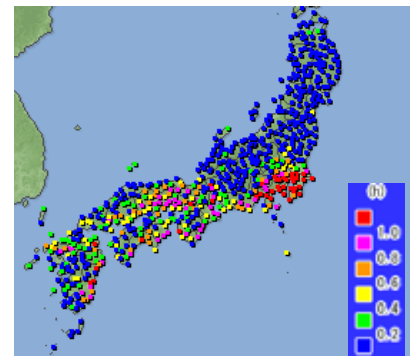


図2 アメダス日照時間
(12月30日11時)

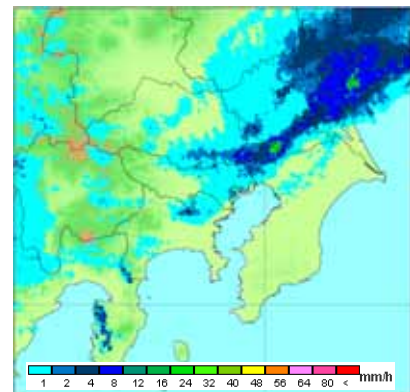


図3 解析雨量(12月30日14時)